

復活するアンダマン海

津波から3ヶ月後の取材 プーケット、カオラック、ピピ、スマラン、スリン、コボン、
コタチャイ、リチェリュロック

Photo&Text **Takaji Ochi**
Special Thanks **D.O.,edive,JTDN**



カラフルなパラソルが立ち並ぶプーケットのカタビーチ



津波の被害を受けなかったポイント、イーストオブエデンの美しい海中風景

2005年2月に行った、津波から2ヶ月後の取材に引き続き、WEB-LUE取材班は、2005年3月、ちょうど3ヶ月後にタイのスマラン諸島を中心に津波後の復興状況取材を行った。たった1ヶ月でどれだけの違いがあるのかと疑問に思う人も多いかもしれないが、思いのほか復興のスピードは早いようだ。そのため、継続してプーケットやカオラックの街の様子やスマランの海中を取材し、少しでも多くの人にもっとも新たな現状を知ってもらう事も重要ではないかとの考えもあり、今回もJTDN (Japan Thailand Diving Network)が主催するシミラン諸島、サンゴ修復ボランティアクルーズに乗船した。

それに加えて、今回はカオラックに拠点を置くediveのスリン、スマランクルーズに乗船。また、プーケットのダイビングサービスD.O.の協力の元、プーケットからのデイトリップエリアである、ピピ島にまで足を伸ばした。



カオラックで見つけた絵は、津波で内陸の池に打ち上げられたイルカが描かれていた



ハナダイとソフトコーラルの美しさは変わらない



ムズジコショウダイとソフトコーラル(写真上) アニタズリーフのサンゴも元気なままだ(写真左)

スマラン諸島

平穏を取り戻していた水中景観

僕はまずediveの船に乗船させてもらい、スマランの海を訪れた。3月半ばで、すでに多くのダイビングクルーズ船が海上に姿を見せていた。同海域を最後に潜ったのは津波の1ヶ月前。その時の印象を思い出しながら、何箇所かのポイントに潜った。ほとんどのポイントにおいて、修復されているイソバナが無かったら、おそらく「津波の被害」があったのか、無かったのかの認識は自分自身ではまったく判断がつかなかった。アニタズリーフや、イーストオブエデンのような砂地のスロープに美しく元気なハードコーラルと、カラフルで色とりどりのソフトコーラルが群生し、キンギョハナダイやインディアンフレイムバスレット、ヤマブキスズメダイなどが乱舞する、スマランを象徴するポイントなどは、以前と何らかわらない、美しい表情を見

せてくれた事にほっと胸をなで下ろした。

それでも、被害のひどかったと言われるブレックファーストリーフなどは、さすがにダイナマイト漁でも行われたのかと思う程、サンゴが破壊されていた。しかし、津波から3ヶ月という短い月日の間にも、海の再生能力は十分に発揮され、おそらく初めて潜る人にとってはみれば、はじめからこんなポイントだったと言われれば、そういうものとして、受け入れてしまうだろうと感じた。

津波当日ediveのクルーズに乗船、津波の直後にスマランに潜り、今回のクルーズに再び乗船していた女性は、「津波の直後は、魚たちが行き場を失っているって感じで、クマノミなんかの中層に浮いて途方に暮れているように見えました。でも今回潜ってみて、魚た

ちが自分の生活場所を見つけて元気に泳いでいる姿を見て嬉しくなりました。来て良かった」と話す。次に乗船したボランティアクルーズでも、津波当日にカオラックやブーケットに来ていたゲストが数名乗船していた。津波を実体験したダイバーたちも、同じ場所に戻って実状を自分の目で確かめたいという心の余裕が出て来たという事だろう。

サンゴの被害だけに関して言えば、1998年に世界中で発生したサンゴの白化現象による被害の方がよっぽど深刻だったのではないだろうか。実際、津波の被害はスマランのダイビングポイントの20%程度と言われている。被害は、島と島の間、海峡になっているごく限られたエリアに過ぎないということを、今回自分自身の目で見て実感した。



津波前のブレックファーストリーフ



津波で破壊された、コモンシコロサンゴ



多くのダイバーが参加したJTDAのサンゴ修復クルーズ

第2回、サンゴ修復 ボランティア・クルーズに乗船

JTDN主催で2月に行われた第1回目のボランティアクルーズは、一般ダイバーへの認知度も低かったせいか、日本からのボランティアダイバーの数は数名(タイ国内からの参加者の方が多かった)で、ほとんどが地元ダイビングサービスのスタッフを中心とした構成メンバーだった。しかし、3月21日～25日の5日間の日程で開催された今回のクルーズでは、日本からのボランティアダイバーは僕を含めて27名、タイ在住者1名、これに地元ガイド9名、公園管理事務所職員1名が加わり、計38名が参加した。

今回は、今までに修復したサンゴが、研究者たちの継続した観察記録が容易になるように、タグ付けする作業が中心。これによって、様々な修復方法で直されているサンゴの再生具合が、どの方法によるものが一番効果的かを調べることができるようになる。しかし、修復方法によっては、すでにまた倒れてしまっているサンゴもある事から、再修復も合わせて行った。同時に、被害のひどかったポイント、まったく被害を受けていないポイントに参加者に見てもらおう事で、スマランの海がまだまだ健在であるという事を知ってもらう事も、重要なテーマだった。

タグ付けを行ったのは、ディーブシックス、エレファントヘッドロック、ノースポイントの3箇所。ポイントによっては流れが強く、作業がまともに進まないどころか、目的のポイントに行きつけない事もあった。修復作業とはいえ、初めの内はサンゴに触ることに抵抗を感じていた参加者も多かった。しかし、徐々に慣れてきて、作業を重ねる毎に手際が良くなり、最終的には3つのポイントで100以上ものタグ付けに成功した。

ボランティアとして参加したダイバーからは、「はやく元気になって欲しい」「また元気になった姿を見に来たい」という声が上がった。また、津波の被害に関しては、多くの人が、「言われれば被害を受けてという目で見ると、何も言われなければ、多分何も分からないでダイビングを楽しんでいたと思います」と答えた人が大半だった。

ダイビング中、津波直後の地元ダイバー有志による作業で修復されていたイソバナを見かけた。すでに結ばれたロープの上に、イソバナが再生を始めていて、ロープを体内に取り込んでいたのだ。皆が思っているよりも再生能力は早いかもしれない。個人的にも、1日も早くサンゴが再生してくれる事を願っている。



修復、タグ付けの水中コースをレクチャーするクルーズコーディネーターの増子さん



ボランティアに使用されたカタダイビングのオーシャンエクスプローラー号の船内でフリーフィングを行う(写真左)ボランティアクルーズ最終日のラチャイ島では、海中ゴミ清掃も行われた(写真下)



修復されたサンゴにタグ付けを行うボランティアダイバー(写真上)タグ付けされたサンゴは100以上に及んだ(写真左)

— スミラン諸島



スカシテンジクダイの群れにアタックをかける、ツムブリやヨスジフエダイ、コボン

スリン諸島

コボン、コタチャイ、リチェリユーロック

スマラン諸島とスリン諸島の間に、ちょうど中継地点のように点在するコボン、コタチャイ、リチェリユーロック。ここにも、今回潜る事ができた。コボンでは、この時期、サンゴの根などには、それ自体を覆い尽くし、まるで一つの生命体かのようにスカシテンジクダイたちが群れている。そこに、ツムブリやカスミアジがアタックをかける。その状況は、今回も変わらず見ることができた。

コタチャイのツインピークスでは、いつものようにツバメウオやカスミアジ、ギンガメアジの群れが出迎えてくれた。根のトップにあるハナヤサイサンゴが一

部削られたそうだが、全体的に見て、それほど変わった印象はなかった。ここでも相変わらず、カスミアジたちが暴走族のように捕食活動に専念していた。今シーズンは、このポイントでのマンタ目撃情報が比較的多いようだ。

リチェリユーロックも何ら変わらない様子で、多くの魚たちが根の周囲に群れていた。僕が修復クルーズでスマランに潜っていた頃、ediveのクルーズ船がリチェリユーでジンベエザメに遭遇していた。

新たなポイント開拓

スリン諸島は、ediveがクルーズでメインのダイブサイトの一つとして利用している。スマラン諸島の北に位置し、ミャンマー国境から数キロ、リチェリユーロックはここから東へ約14kmにある。メインのダイブポイントは同諸島の中でも一番南に位置するトリンラ島周辺。浅いリーフには見事なエダサンゴの群生が広がり、足の踏み場も無い程だ。様々なリーフフィッシュが群れをなしてサンゴ礁の上を楽しそうに泳いでいた。津波前に見た風景とまったく変わらない。「部分的には、サンゴの被害もありましたよ」と言われたが、もともとのダイビングポイントだったエリアはほぼ健全だった。

しかし、彼らがシークレットポイントと名付けていた、マッコスカーズラス(フラッシュ系のペラ)の一大コロニーがあったサンゴのガレ場は、津波の勢いで一層されてしまっていた。あれほど見事に群れてフラ

ッシングするフラッシュ系は、他の海では見た事がなかったので、その損失は非常に残念だった。しかし、クルーズ中に行われたリサーチダイビング後、「新しい、フラッシュ系、見つけましたよ!」とガイドの高見沢君が嬉しそうに海から上がってきた。彼らは、津波のダメージに臆する事も失望する事もなく、次々に新たなポイント開拓に専心している。



スマランの顔、トラフザメの姿も頻りに見られた。コタチャイ



ギンガメアジの群れも以前と変わらなかった。リチェリユーロック



スリン諸島

政府によって再建された住居の前でくつろぐモーケン族の人々

シーブシーたちの智慧と生命力

スリン諸島には、リゾート開発が進み、急速な発展を続けるタイ南部にあって、今だに伝統的な海での生活を続けているシーブシーと呼ばれる人々が生活している。本来、船に家財道具一式を積んで、アンダマン海の島々を転々と生活していた彼らは、タイでは「モーケン族」と呼ばれ、基本的に今でも、魚をとらえたりしながら、自給自足の生活を行っている。

津波の時に、かなりの規模で潮が引き、そこに魚を取りに出かけた人々等が津波に飲み込まれてしまったケースが多かったそうだが、モーケン族の間では、「潮が引いたら、高台に逃げろ」という古くからの言い伝えがあり、今回、津波が村を襲う以前に、異変に気付いてすでに皆高台に避難していたという。

情報が氾濫し、何が有用で、必要な情報なのかがわ

からなくなっている今の時代に、彼らは自分たちの命を守るための最も重要な情報だけを失わずに子孫代代受け継いでいたわけだ。はたして、この前に起きた津波はいったい何年前の事だったのだろう。正確な情報ではないが、170年前に一度この海域で津波が起きているとも聞いた。

村は津波の被害で消失したが、政府からの支援で、あらたな住居が建設されていた。上陸して、彼らの生活を少しだけ伺ってみた。僕たちから見れば、退屈な生活に写る。しかし、周囲が急速に発展する中において、生きる事の本質を静かにまっとうしている彼らの精神の強さを、僕らは見習わなければいけないのではないかとも思った。



昔から使われている船の中には、家財道具がつまっている



パトンビーチにあるバーでは、タイ人女性たちが、客引きを行っていた



ダイビングトリップの玄関口、チャロン湾のビーチに並ぶスピードボート



欧米人客の目立つプーケットのビーチ(写真左)
プーケットの夜も活気を取り戻しつつあった(写真右)

プーケット

欧米人で賑わうプーケットの夜

今まで何度も訪れているのだが、夜のプーケットはまったく知らなかった。夜が苦手というもあるが、毎回メインのロケ先がカオラックだったからだ。D.O.のオーナーガイド、藤中君に案内されて、パトンの中心街に向かった。「ここが新宿の歌舞伎町みたいな通りですよ。」と向かった通りは、きらびやかなネオンが煌煌と輝き、タイ人女性たちが明るく客引きをするバーが乱立していた。「普段なら、人をかきわけて進まなければ進めないけど、今ならスムーズに歩けますね」と言っていたが、僕にしてもらえば、それでも十分混んでいるという印象だった。が、確かに日本人観光客の姿はほとんど見かけなかった。賑わいを見せているの

は欧米人たちだ。特に目を引いたのが、その通りのちょうどセンターくらいにあるおかまバー。まるでそこだけさらに別世界のように、多くの欧米人客で混雑していた。

津波の被害があったという海岸通りに出てみた。ところどころにまだ囲いを作って、改修を行っている店舗があるものの、ほとんどの店が復旧していて、営業を再開していた。津波の印象はもうほとんどぬぐい去られていたようだ。

昼間、カタビーチなどに足を伸ばした。プーケットの名物にもなっているビーチに延々と並ぶカラフルなビーチパラソルの下でくつろぐ欧米人客たち。ここ

も日本人観光客の姿はなかなか見当たらない。日本人の慎重な国民性というものが伺えて、なんとなく可笑しかった。

プーケットはこれから雨期に向かうが、雨が降り続けるというわけではないようだ。西風が強くなり、スミランクルーズには出れなくなるが、プーケットのダイトリップエリアは年中開催している。街自体は十分活気を取り戻しているし、プーケットの陸上観光も十分に楽しみたいという人にとってみれば、プーケットにシーズンオフはあり得ない。

ダイトリップエリアも健在

大きな被害をもたらした、ピビ島本島には行かなかったが、ピビのダイビングポイントとして有名なピダノック島、ピダナイ島の海中に潜った。プーケットからはボートで約2時間30分の距離にある。ピダノック島の垂直な岩礁が海中にまで続き、ダイナミックなドロップオフを形成している。壁面は一面にカラフルなウミトサカが群生し、岩の切れ目などにはスカシテンジクダイが、水面に向かって天の川のように連なっていた。中層では、大型のイケカツオやマテアジが激しく捕食活動を行っていた。D.O.の藤中君が大げさなゼスチャーで、「こっちから波が押し寄せて、この辺のサンゴを破壊した」と水中で説明してくれていたが、まったくピンとこなかった。初めて潜ったポイントだから当然なのかもしれない。

翌日には、シャークポイント、アネモネリーフに潜る。プーケットからは約1時間45分。スミランに比べ、透明度の悪さは、このエリアでは当然の事と聞いていたが、思ったよりも透明度も良く、ダイビングが楽しめた。特に、噂に聞いていた水中の魚影の濃さにおどろいた。カラフルなソフトコーラルに彩られる壁面を覆い尽くすようなヒレナガリボンスズメダイの群生、ロクセフエダイの群れの密集の仕方も半端ではなかった。しかし、エキジットした水面で藤中君は「いつもの6割程度でしたね」と首をかき上げた。別に魚影が薄いのは、津波とはまったく関係は無いようだ。

僕が帰国後、シャークポイントでは、ジンベエの目撃情報が多発していた。



津波被害のひどかったカオラックでは、未だに惨状を物語る状態のままのリゾートも残っていた(写真上) まったく津波の被害を受けなかったリゾートもあった。アンダプリリゾート(写真左)

復旧に向けての作業が続く

タイの陸上で一番被害の深刻だったのがこのカオラック。今までに何度も訪れていただけに、情景の変化振りには心をいためた。ほとんどがビーチサイドにあったために全壊したリゾートも少なくない。宿泊したことのある多くのリゾートが、何もない更地へと姿を変えていた。プーケットの復興の早さに比べて、まだまだ爪痕を全て隠してしまうまでには時間がかかりそうだと感じた。しかし、多少のペースの違いはあるものの、視察した全てのリゾートで修復作業が開始されていたのは事実だ。ediveやタイのタオ島にも拠点を持つBig Blueなどのダイビングサービスがあるメインの通りは、閑散としているものの、無傷の状態

残っていた。その様子には数年前に初めてこの地を訪れた時ののどかさを感じられた。ediveの平川君の話では、「今の段階で、来年受け入れが可能なホテルがすでに16は有る」という事だった。

今シーズンはプーケットやタオに拠点を移して活動していた、両ダイビングサービスは、来期、カオラックでの活動を再開する予定だ。

僕が帰国した翌日の4月2日から4日までの3日間、カオラックでは津波からちょうど100日の追悼セレモニー(100day Tsunami Memorial)が行われた。多くの人々が参列し、仏教、イスラム教、キリスト教などの僧侶や牧師などによる祈りが、宗教の枠を越えて亡くなった人々へ捧げられた。

また、スリン諸島に住むモーケン族の間には、船を海に流すことで、痛みや苦しみから解放されるというしきたりがあり、奇麗に飾られた船が、人々の手によって海に流された。津波で亡くなられた多くの人々の魂に祈りをささげつつ、1日でも早いカオラックの復興を参列者の多くが願っていたに違いない。

活動を開始していたタプラム湾

カオラックからスミランへのデイトリップ、クルーズ船が出ていたタプラム湾へ向かった。ediveは現在プーケットのチャロン地区に仮の拠点を移しながらも、ゲストのクルーズ乗船は、このタプラム湾から行っていた。タイの軍港が隣にあり、ミャンマーとの国境警備にあたる軍艦1隻が津波の威力で座礁したままになっているが、僕が滞在中に復興作業により無事海に戻ることができた。

狭い港は、以前のようにスミランデイトリップのスピードボートで溢れかえていた。D.O.などプーケットの各ダイビングサービスが利用している、乗り合い

クルーズ船ソブンーンなどへのゲスト送迎も、すでにここからスピードボートで行っていた。港は3月末現在、ところどころに津波の傷跡を残すものの、ダイバーの受入には支障がない状態に戻っていた。

—すでに、多くのメディアや現地ダイビングサービスなどのHPなどで、津波後のスミラン、プーケット、カオラックなどの現状を知っている方々も多いことだろう。このレポートでは、個人的な感情を極力出さずに、取材当時の状況を伝えたいつもりである。来シーズンは少しでも多くのダイバーや観光客で賑わう、プーケットやカオラックに再び訪れられることを、今から楽しみにしている。

取材協力

D.O. <http://www.divingoutlet.net/>
edive <http://www.edivekhaolak.com/>
JTDN <http://jtdnet.exblog.jp/>

JTDN参加現地ダイビングサービス (アイウエ順)

- アクアランド
- カタダイビングサービス
- サムダイビングサービス
- ダイブアジア
- ビッグブルー
- ブッダビューダイブリゾート
- マリクエストダイバーズ
- マリプロジェクト



カオラック



落ち着きを取り戻したタプラム湾の入り口に、未だに子供の生存を願う捜索のポスターが張られている

西オーストラリア パース近海・エスペランス・シャークベイ
マーシャル諸島 マジュロ・アルノ・ミリ環礁クルーズ
タイ タオ島
イギリス マン島のウバザメ
マレーシア
タイ 復興支援取材第2弾

WEB-LUE

UNDERWATER
WEB MAGAZINE

6月15日発行予定
次号のごあんない

NEXT ISSUE

写真家のひとりごとコラム連載開始！

越智 隆治
トリニダード・トバゴ

鍵井 靖章
タヒチ・ルルツのクジラ